

講演抄録「創作表現規制問題の国際的状況」

2017年1月28日 キャンパスプラザ京都

講師：兼光ダニエル真（翻訳家）

主催：NPO 法人うぐいすリボン

本日は、表現の自由やマンガ・アニメがなぜ自由であるべきかという問題から離れて、ちょっと違う側面の話をしたと思います。

本題に先立って、一つ大事な質問をさせていただきます。正解はございません。皆様が、表現の自由が及ぶ範囲についてどうお考えか質問しますので、挙手をお願いします。まず、フィクションであればどんな表現でも許されるべきであると思う方は挙手をお願いいたします。では、他人に迷惑が及ばない限り、表現の自由は守られるべきと思われる方。次に、公的な意義がある情報であるということならば、表現の自由はなるべく保障されるべきと思われる方は挙手をお願いします。では、不法行為を伴わなければ、表現の自由は保障されると思われる方はどれくらいいらっしゃいますか。

今の結果からも見て取れるように、表現の自由の範囲をどう考えるかについて、自由を守りたい人にも温度差があります。その温度差は、海外でも非常に多様です。その温度差という問題、その温度差がどこからくるのか、それが表現の自由をめぐる議論—特にアニメ・マンガについて—にどう影響するのかが、今回の主題です。

私、兼光ダニエル真、戸籍に書かれている名前でございます。ペンネームではございません。職業は翻訳家です。翻訳という職業は、単に辞書の代わりではありません。作者の意図や作者が何を読者に伝えようとしているのか、その表現がどのようなポジションを代表しているのか、といったことを考える必要があります。その中で、日本とアメリカの視点の違いや、アメリカの中での様々な視点の違いを、色々と意識しています。

1.1990年の渡米と有害コミック問題

生まれも育ちも実は東京なのですが、母親がアメリカ人だったので、特殊な経験もしました。子どもの頃ガンブラが大好きだったのに、父の在外研究の都合でアメリカに行くとガンブラが売られてなくて、「なんでロボットのプラモデルがないんだ」と嘆いたこともありました。娯楽や子どもの文化も国によって随分違うのだと、若いころから意識させられました。

私は1990年代にアメリカに行き、それから10年以上滞在しました。この時、有害コミック騒動が起きました。91年の2月に東京のいくつかの書店が捜査を受け、社会的に容認

されていない「裏マンガ」なるものがやり玉にあげられました。それ以来、同人誌などへの風当たりが強くなり、コミケが幕張から追い出されるは、色々と面倒な事案が持ち込まれるは、当時の関係者の方々のご苦勞は想像に堪えません。あのときのエロマンガに対する風向きの激しさといったら、友人の漫画家が、編集者から原稿を焼却するか庭に埋めろと言われたのを、よく覚えています。また、日本に戻るたびコンビニに置かれているマンガの種類が変わったり、ページが半分真っ黒になったりしているのを見て、表現規制とか検閲ということに関する興味が湧きました。そして、アメリカのミネソタ大学にいる頃から、日本とアメリカの検閲の歴史とか文化論について、職業とは別にかかれこれ 25 年ほど勉強してきました。

2.日本と欧米の間のセクシュアリティの違い

日本とアメリカ、日本と欧米におけるマンガ・アニメ、それから性表現についての検閲については、前提条件が異なるということが大きな問題です。

神の目と世間体

欧米と日本では性表現がマンガになることに対して、犯罪観の違いや、マンガ・アニメ裾野の違いとか、女性が参画するかということなど、大きな違いがあります。それは、簡単に要約すると、日本とアングリカン地域—これはイギリス、南アフリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、そしてアメリカですが—の中のセクシュアリティを比較すると、神の目と世間体という違いがあります。

神の目というのは、一神教の考え方で、神が天の向こうにいて、人々の行いをどこでもずっと見ている、というものです。それを常に意識するような生き方をしなければならぬ。この考えが結構大きな影響力を持っています。

これに対して日本は、どちらかという世間体のほうが重要視されています。倫理観において、絶対的な価値観と相対的な価値観の違いがあるのです。それを意識せずに議論すると、話がこんがらがります。

絶対的価値観と相対的価値観

この絶対的価値観というのは、今言った通り、神の目がずっと向けられているので、どのような場合でも言動を変えてはいけないというものです。たとえば、アメリカ人にとっては、私は私で、誰と話していても、相手が大統領でも子どもでも、口調を変えないということが、1つの理想とされます。これが人格であり、人間にとって大事なこととされます。それに対して日本ではご存知の通り、敬語の使い方とか上下関係というものが強く意識されます。

それは日本語の面倒さでもありますが同時に人間関係を調和しやすい。自分の立ち位置に応じて、どういう振る舞いをすればいいのかという、いわゆるマニュアルがたくさん用意されています。そのマニュアルに馴染めないといわゆる「コミュ障」になってしまうのかもしれませんが。逆にアメリカ人の場合だと常に自分を出さねばならないという意識が極端に暴走すると、自分の中の神さまが許容するままライフルで人を撃つといった極端な自己主張に突っ走る例があると思っています。少なくとも、自分の自己とは何かということにおいて、考え方が違う。これは意識していただきたいと思います。

そのアングリカンですが、カトリックもプロテスタントも同じキリスト教だから同様に考えられるかといわれると、これが難しい。カトリックは古いキリスト教で、法王様がイエス・キリストと神様のことに関しては全部説明してくれるから、法王様の言うことに従えば良きキリスト教徒になれると考えます。これに対して、「本当は法王などに頼らなくても人間一人一人で信仰できるんだ」というルターの宗教改革によって生まれたのがプロテスタント。ほぼ同時期に、イギリスの王様が「離婚したいけどカトリックの法王様が許してくれない、だから独立しよう」といってできたのがアングリカンです。

ここで大事なのは、プロテスタントとアングリカンでは、免罪に対する意識が異なるということです。カトリックの場合だと、法王様の言っているルールを守っていれば、あとは結構羽目を外しても許される。それに対して、プロテスタント、アングリカンのほうはどちらかという、古い世俗とか宗教とか習慣は全否定して、厳格な教えを押し付けるといった側面があるように思えます。

正しい性の問題

なぜこのような話をするかという、**「正しい性と、悪い性」**という問題に関わるからです。

欧米では、そのセックスは正しいの？悪いの？というような自問自答が繰り返されます。日本の特に戦後では、「羽目外して他人に迷惑かけなければ基本的にはなんでもいいんじゃない」という流れがあります。

少なくとも、日本では特定の創作物—マンガとかアニメの中で描かれるセックスや性表現が正しいかどうかということは、あまり議論されません。でも欧米だと、時々あるんですよ。それがなぜ出てくるかという、正しい性、正しいセックスという考えが宗教から引き出されているからです。これがセクシュアリティに関する、第一の大きな違いです。

3.日本と欧米の間の検閲の違い

崇高な聖書と下賤な世俗

もう1つが検閲の違いです。

これも結局宗教が大きく出てくるのですが、欧米では、「Good Book」つまり聖書以外は別になくてもいいという極端な考え方がある、少なくとも昔はありました。崇高な聖書以外の本は世俗的で下品なものであり、教会の教えの中に許容された範囲でしか存在できないという議論が欧米では長年存在していたのです。

これに対して一部の人々が、こういった表現も許される、神を歌うコーラスだけではなくて自分たちの愛を歌う歌も神は容認してくれるはずだとか、小説っていうのは単に聖書の内容をなぞらえるものではなくそれ自身に1つの意義がある、ということを主張してきました。小説というものが、その存在を立証しなければいけない時期があったのです。これは、マンガもそうですし、ロックも、オペラもそうです。それぞれ宗教や倫理観の中で存在を許されていなかったところから、自分の存在を開拓してきたのです。

お上の目、公序良俗の概念、権威と伝統の後ろ盾の獲得

日本はちょっと違うんですね。日本では、極端な話、お上にさえ歯向かわなければ、それぞれの階級—武士なら武士、町人なら町人の文化—の中で何をやっても、あまりお咎めをしない。時々上からの生類憐みの令とか色んな命令が下りはしても、基本的に町民の生活と武士の生活をごったにすることはない。それぞれ区分というのがあった。

それは表現規制に関しても同じでした。宗教経典は守るけれど、ほかのものは全部焼き払え、といったことは日本ではあまり起きていません。町人が町人の文化を保持することを誰も止めようとしません。少なくとも、戯作や浄瑠璃や小説が自分の存在を開拓せねばならない、ということは日本ではあまりなかったようです。

また、日本では、許容される表現の範囲は変わっても、お上の権威自体はあまり変わっていない。お上の権威の前提条件、なぜこの表現は許されるか許されないかというのは、戦前と戦後ではがらりと変わりました。戦前はお国のため、戦後なら民主主義のため、となるでしょう。しかし、権威自体は変わっていない。上意下達の倫理観は変わっていない、という部分があります。

もちろんそれを意識して、ちゃんと民意や民主主義に基づき、人間を個別に考えるべきだということも日本で議論されてきました。しかし、古いものになぜ権威があるのかということになると、意外と「古いものだとなんでも許されるの？ 新しいものだと自分の立場を立証するのになんでこんなに苦労するの？」ということが、日本ではよくあるように思われます。

これに関連して、日本と欧米の検閲のシステムには、1つとても重要な違いがあります。それは、欧米には統一基準があるということです。神の目の話をしましたが、個人の日記でも、新聞に掲載される記事でも、すべて1つの倫理基準でよいか悪いかを決めようという傾向が、欧米にはあります。それに対して日本は、たくさんの人の目に入る場合は規制が厳しいけれど、一部の人間しか見ないものは規制が緩い、という傾向があります。

もちろん、これは極論です。でも、今の日本でも、誰がその表現を見ているかによって

規制の基準が変化します。ごく最近 CG ポルノを巡る裁判においても、こういった CG ポルノはそこに実在の児童が介在していなくても児童の存在を脅かす、ということが指摘されました。その表現物がどうやって生まれてきたかではなく、その影響力が意識されたのです。日本の学校教育で、「〇〇君、君たちの間ではそれをやってもいいけども駄ではやっちゃだめだよ」というようなことをイメージすると、ある程度はわかりやすいですね。

ここまでセクシュアリティと宗教、検閲、という2つの前提条件の違いをお話ししてきました。いよいよ、アニメ・マンガでの性描写という最初の本題に入りたいと思います。

4.日本アニメ・マンガでの性描写と欧米（特にアメリカ）

日本のアニメ・マンガが北米に浸透していった過程について、簡単に説明します。

第一世代がアニメ・マンガに接したのは、『鉄人 28 号』とか『ジャングル大帝』とか『マッハ GoGoGo』、60 年代の頃です。この頃の作品は、ある意味無国籍化されたよう形で、放送されていました。そういったアニメを、日本のアニメと知らずに観て育った世代っていうのが第一世代です。

第二世代は、『超時空要塞マクロス』『機甲創世記モスピーダ』『超時空騎団サザンクロス』の3作品をごっちゃにして再編集した『ROBOTECH』、それから『百獣王ゴライオン』と『機甲艦隊ダイラガーXV』を編集して新しいドラマにした『ボルトロン』などを観た世代です。彼らは、これらの作品は明らかにアメリカの『トム&ジェリー』とか普通のアニメとは違うものだと感じました。少し調べると、80 年代の話ですから雑誌などに情報が掲載されていたんです。日本にはアメリカとは違うアニメとマンガの文化があるという情報が、アメリカとカナダでどんどん広がります。もともとテレビで流されたものです。

何よりもこれを観た人たち、ヨーロッパの映画を好むようなちょっとクセのある方々からすると、これは面白い、こんなものは観たことがないと評判になります。板野のミサイルサーカスとか、日本のアニメでしかないようなものをバンバン見せつけられた。これはカルチャーショック、デカルチャーと叫びたがるような世代。これが第二世代の状況です。

第二世代の方々は、とても飢えた状態で日本の作品を輸入したり、いろんな情報を集めて同人誌みたいなものを作ったり、ファンが集うオフ会みたいなものを開きました。この人たちはすごく頑張って会社を作った人たちもいるんですよ。この人たちが日本のアニメを輸入する会社を作って、それで日本のアニメをガンガン持ち込んでアメリカで広めていった世代です。

それを観たのが第三世代です。第三世代は物心ついた頃からアニメ・マンガに接する機会に恵まれていた。第二世代の場合だと、外連味がある SF アニメとかアクションものとかホラーものとかを好み、そこにエロも入っていた。それに対して第三世代にとって影響力が大きかったのは『ドラゴンボール』や『ポケモン』もそうですが、何より『セーラーム

ーン』です。女性向けのアニメがあるんだということが、一気に新しい世代に広がりました。

90年代前半のアメリカのアニメのファンの集会は、日本の男性向けの同人誌即売会とまったく同じ雰囲気でした。20代後半から30代40代のおっさんばかりで、モテねえなお前らっていう人間ばかり。ところが第三世代の頃から、『セーラームーン』を若いころから読んでいたような、いわゆるリア充の人間でも十分に楽しめるような雰囲気になってきた。

大学の教室に、普通のアメリカの大学生が『セーラームーン』のファイルを持ち込んできたのを見た時は衝撃的でした。日本のアニメ・マンガというのが第三世代にとっては無限の可能性を秘めていたのです。女性向けもあり、幼児向けもあり、大人向けもあり、いろんなものがある。可能性がどんどん広がっていくような時代。第一次ロリコンブームの世代の人間なら「あーわかる」と言ってくれるかもしれませんが、なんでも表現できるんだという、面白い時代でした。

そして最後が第四世代、インターネットが物心ついた頃からあるような世代です。第三世代が思春期に日本のアニメ・マンガにふれたのに対して、第四世代にとっては最初から日本のアニメ・マンガがある。だから、日本のマンガ・アニメだから特別なものとは、あまり意識しない世代です。

北米で日本アニメ第一世代と第二世代が誕生した80年代、日本では「第一次ロリコンブーム」の下、実験的で面白い作品が作られていました。その時期に、アメリカでも日本の性表現に接した人がいて、いろんな衝撃を与えました。

ちょうど70年代のアメリカでは、ポルノの解禁といわれる判決があり、エロがいっぱいあふれるような時代になっていたんです。

同じときに発生したのが、「サタン・ヒステリア」でした。なぜここで悪魔宗教が出てくるのか。セックスやポルノに関する社会的倫理観が自由になっていくのに対して、それに対する反動なのかもしれませんが、70年代後半から80年代前半のアメリカでは「悪魔を崇拝する連中が、子どもを誘拐して殺したり、エロビデオを作ったりしている」というヒステリアが流行しました。

児童ポルノ法が登場した背景は2つあります。1つは性産業における児童労働を禁止しようということ。アメリカでは元々は性産業自体が違法だったので、一部で性産業が解禁されたとき、性産業における児童労働の禁止については再度法整備する必要があった。そしてもう1つが、この悪魔宗教に対するヒステリアです。児童ポルノ法は、本来、子どもを守るべき法律なのですが、ここでも、宗教的に良いセックスか悪いセックスかという議論が出てきます。子どもを守るためなのか、それとも子どもを性的対象と見ること自体が「悪い妄想」なのかという議論が起きたのです。

そんな混乱した議論の中、90年代中盤からは日本の性的作品が第三世代の力を借りてた

くさんアメリカに流入しました。日本とアメリカでは児童ポルノに対する基準が違い、これが色々なトラブルにつながります。

具体的には、90年代中盤になってくると、アニメ雑誌やサントラ集、アニメのVHSテープなどの他に、グラビア写真集やアダルトビデオも日本からアメリカに輸入されるようになります。当時、日本では未成年者の写真、ヌードは容認されていた時代でした。それがアメリカでは違法なときに売られていたわけです。結果的に、日本では合法的なものがアメリカでは超違法といった問題が起きました。アメリカ中西部で日系書店が摘発を受けた事件(ヤオハン事件)を1つの契機として、日本のコンテンツはアメリカとは倫理基準がまったく異なるということが、警察関係者や一部の児童を守りたい方々の間で注目を浴びます。そういう温度差、子どもを守る意識が日本とアメリカでは違うんだということについて、90年代から大きな議論が始まったというのが、私が一番述べたいところです。

そして、保守宗教原典派と、左翼社会啓蒙派、この二つの規制機運の高まりが、ポルノの規制議論を加速していきました。

保守宗教原典派とは、すごくわかりやすく言うと、ポルノ解禁以前のアメリカに戻したいという風に考えている方です。共和党の2016年の公約にも、「ポルノは危険なものであり、それは社会害悪であり、これは規制すべきだ」という内容が盛り込まれています。

その一方で、社会的により良い場所を作っていくという考え方、社会的に好ましい表現を広めるべき、及び反差別という文脈で、表現を規制すべきだという議論が出てきます。ドヴォーキンさんをはじめ、一部フェミニズムの論者による、女性を搾取する社会的形がポルノの中に反映されているので、ポルノというのを規制すればその連鎖を打ち切れるというような考え方などが、これにあたります。

ここで大事なのが、販路を守りたい人々、つまり、日本からアニメコンテンツを持ち込んで販売している人たちの動向です。彼らからすると、日本のマンガ・アニメというコンテンツはアメリカの若い子たちに人気がある。でも「面倒くさい」ものを日本は作っている。その面倒くさいものさえなければ日本のマンガ・アニメはアメリカでたくさん売れる。だから、この面倒くさいものを無くせばいいんだというような議論が出てくる。これは日本のクリエイターや制作会社やゲーム会社にも、「それさえなければ売れるのに」という議論として流れ込んできます。これが日本の制作現場に影響を与えているということを、強く述べたいのです。

5. 日本アニメ・マンガコンテンツの規制を巡る英語圏（北米とその他）のクラスター

ここまで、日本のコンテンツが流入するにいたった経緯を説明しました。最終的にここで強調したいのがインターネットのおかげで、倫理基準とか文化的背景が異なるにもかかわらず、コンテンツ自体がボーダーレスにいろいろと行きかうようになりました。これが1

つの軋轢を生んでいるのです。これは重要な点だと思います。

それを踏まえたうえで、実際に日本のマンガ・アニメコンテンツの規制を巡って、どのような派閥があるかをお話ししたいと思います。最初に、皆さんにどこまで表現の自由が容認されるべきですかというアンケートを取ったとき、皆さんの中でも温度差がありました。同様に、表現の自由に積極的なアメリカの中でも、性表現に関しては大きな温度差があります。それらの意見が具体的にどう違うのか、ご紹介したいと思います。

欧米の価値観に左右されがちなライトユーザー層

まずライトユーザー、いわゆる第四世代とか第三世代の方々からすると、日本のマンガ・アニメっていうのを1つのコンテンツとして楽しんでいるので、「日本のアニメはめちゃくちゃ破天荒で面白いんだけど、エロいのはちょっと何とかならないのかな」とか、「萌えさえなくなれば日本のアニメは良いのに」「いやいやそういった萌えが良いんだよ」とか、大激論がよく起きます。アメリカのライトユーザー層、特に第四世代になると、日本のアニメ・マンガ全体が好きというよりは、個別の作品が好きという人が多い。その結果、自分の好きなマンガ・アニメ以外のコンテンツにあんまり興味がないとか、「お前が観ているものさえなくなれば俺の観ているものは揚げ足を取られなくて済むのに」といった、揚げ足の取りあいみたいな現象が実際に起きています。

アメリカで表現規制について積極的に活動しているの方々から憂いの声としてよく聞くのですが、ライトユーザーの方々からすると、日本のアニメ・マンガというのは普通にあるもので、それを積極的に守りたいというような意識は弱い、ということです。いずれにせよ、ライトユーザーとマニアの間に温度差があり、ひとくくりにはできないというのが、とにかく重要な点です。

左翼社会啓蒙派（アンチから SJW と呼ばれる人たち）

次に、ライトユーザーに影響を与えているもう1つのクラスターが左翼社会啓蒙派、アンチからはSJW（Social Justice Warriors）—日本語に翻訳すると社会的正義推進戦士—と呼ばれている人々です。彼らは実際には、フェミニズムや人種差別反対や、格差社会を是正したいという観点から取り組んでいるの方々です。その中の一部の方々が、ややもすると向こう見ずに自分勝手な正義感で突っ走っているという風に、私には感じられます。

つまり、アニメとかの創作物について、女性の主人公率は50%にすべきだとか、人種差別的なものを減らすために黒人の主人公増やすべきだということを主張するのです。そういう作品をあなたが作ることは奨励したいし、個人的にはそういった作品も面白いとは思いますが、それを他人に押し付けるのはやめてくださいと私は感じます。彼らは別に悪人ではなくて、もっと良い社会を作りたいという正義感の強い人たちなんです。「過剰な配慮を他人に強要する傾向がある人」とも言えるかもしれません。

ゲーマーゲート派（アンチから男性優位主義、人種主義と呼ばれる人たち）

これの対になるのが、ゲーマーゲート派の方々です。

かつて、英語圏のゲームの世界では、絶対に避けては通れないくらい大きな事件があったのです。要約をします。3年ぐらい前に、女性のゲーム開発者がゲーム批評メディアの男性記者たちと性的関係を持っていた持っていないということが話題となり、その女性開発者の作品をめぐる倫理的におかしい評論がなされたという話が加速しました。それから、フェミニズム的な観点からゲームを評論することを嫌う方々が、フェミニズム的な評論家の方々に対する脅迫行為もしました。最初はゲームコンテンツの倫理観や、検閲が必要なのかという議論が根幹にあったはずが、ゲームは男性のものだから女性は出てけという考えを前面に出して、女性評論家やいわゆる SJW の人たちに血で血を争うような闘いを仕掛けた。

このような一派が、ゲーマーゲート派と呼ばれています。彼らは、アンチからは男性優位主義とか人種差別主義とか言われるのですが、結局自分が今まで好きだった PC ゲームだとかコンテンツについて、SJW から倫理観を押し付けられたくない、という考え方が強い人たちです。この人たちは「他人が配慮するのに過剰反応している方々」と要約してもいいでしょう。自分の好きな表現が非難されるのも我慢できない方々といえるのかもしれませんが。

アニメ好きの中にはこのような方が一定数おられますし、彼らがトランプの支持者の中にもいるというのも事実です。ネットで、トランプ支持者はアニメ好きだといった陳腐な言説が加速している理由の1つがこれです。

彼らと対立したのが、国連や人権条約を重要視するような左寄りの方々です。この左寄りの方々が、表現規制の要求とか、日本のコンテンツ産業に対する問題提起をして、それに対してゲーマーゲート派が嘔みついた。

具体的には、これは『レイプレイ』を巡る事件です。元々、イギリスの議員さんが「強姦ゲームがあるなんてけしからん」と指摘したことがきっかけだったのですが、それとは別にニューヨークのイクオリティ・ナウという団体が、「レイプレイのようなものは規制すべきだ」と言ったんです。この団体は、女性の立場を社会的に向上させていくべきという観点から、こんな商品はボイコットしようと言いました。ボイコットするのはどうぞ自由になんですけども、それを法的に規制しようとも言い出したのです。

これに対して、英語圏のニュースサイト・コンテンツポータルサイトの **Sankaku Complex** (はちまとか 2ちゃんねる速報のような、自分ではほとんどコンテンツを作らないけれど、色んなものを掲載して、そこでファンの人たちが議論しているようなサイト)の管理人が、「イクオリティ・ナウの連中が、日本のコンテンツを楽しむ権利を奪おうとしている。攻撃すべきだ」と言い出した。そして、**Sankaku Complex** の支持者がイクオリティ・ナウを攻撃し、それに対して「ほれ見たことか、レイプレイなんか保護したがる人間は、私たち女性の権利や安全を脅かしかねない危険な人間だ。だから日本はこういったコンテ

ンツをなくすべきだ」という批判が起きた。

この問題に日本側はまったく関わっていないのですが、日本のコンテンツをめぐって日本の外で議論が加速しやすいのです。それは覚えておいてくださいとしか、言いようがありません。

保守・地方反動派

これに加えて古い保守・地方反動派の方々というのは、最初に言ったエロとかポルノとか女性の権利全体に対して巻き返したい、ある意味 50 年代のアメリカに戻りたいという人々です。女性の権利というのは家庭のなかに打ち留めていくべき、アメリカは白人のキリスト教徒の国だというような考え方の人たち、今でもこういう人たちが若干いるのです。

規制反対穏健派

それに加えて昔から議論をしている規制反対の穏健派がいます。そもそもアメリカの建国の中で表現の自由が重要視されていたのは、色んな議論を起こすためであって、特定の誰かを守るためのものではない、皆を守るための表現の自由が存在すべきだと考える人々です。セックスポジティブ派のフェミニストもこちらに所属していると言っても過言ではないと思います。

反権威主義

反権威主義者、リバタリアンとよく言われる人々は、表現内容がどうこうではなくて、誰かが表現を規制しようとする事自体に、真っ向から反対している人たちです。連邦政府の銃規制に対して真っ向から反対するのもこの人たちです。つまり、銃規制もエロ規制も反対という人たちなのです。

インフラ整備・提供者（コンベンション、Amazon、Facebook、Twitter、など）

最後に重要なのが、インフラを実際に整備・提供している方です。アメリカのファンの集いであるコンベンションとか、アマゾンやフェイスブックやツイッターなどです。

これらは非常に影響力が大きい。けれども論理的な倫理基準が他とは違う。当局からの規制とか、クライアントやクレーマー対策といった、企業を運営するうえで元から意識しなくてはならない問題がたくさんある方々です。彼らは、いわゆるライトユーザー的な視点に近寄ってきます。つまり、波風を立てないような表現なら基本的になんでもあり。人気があるならば、ある程度なんでもあり。でも、それはあくまで経営上の合理性から守るということであって、面倒くさいことが起きると簡単に切るといった面が、インフラ提供・整備者にはあります。

その倫理基準が、インフラとしての役割を守りたいゆえに、フェイスブックがダビデ像の写真を不適切なコンテンツと断ずるなどの形で暴走しやすい。

これまでアメリカにおける、規制に対して温度差のある重要なクラスターを紹介しました。しかし1つだけ、日本ではよく見られるアクターが抜け落ちています。それは、現実主義者や権限を守りたい人たちです。いわゆる、監督する権利を守りたい人たち、具体的に言うと、PTA、警察などです。こういった方々は、どちらかという規制の枠組が残ってさえいればよく、何をどう規制すればいいのかということにはこだわりません。

アメリカではこれが意外と薄いんですよ。なぜかと言うと、日本と違ってアメリカでは警察が法案を作成したり立法に直接関与するなど聞いたことがありません。日本では、警察から「皆さんの倫理観をよりよくさせるには、こういった法律作った方がいいですよ」とボールを投げて、それが議員さんとのキャッチボールになっていく。これが、アメリカではほぼないです。逆に日本でこういうことが行われているというふうに説明すると、欧米人はほとんど「そんなバカな」と驚きます。警察は議員が作ったものを守るんだろ、警察が法律を作るなんてナンセンスだと。でも、日本だとお上、つまり社会をどのようにしてよく回していくかということを考えなければならない人たちがいて、それに警察も一部組み込まれている。これが1つの大きな違いだと思います。

6. 海外マスコミの傾向

最後に、欧米のマスコミの傾向を要約したいと思います。

すごくわかりやすく言うと、欧米のマスコミでは、左翼社会啓蒙派の方々の持つ問題意識を提起したほうが、ニュースがよく売れるのです。たとえば、先の大統領選ではトランプ支持者たちがマスコミのレーダーを完全にすり抜けていた。それは、マスコミのサービスに対して、ちゃんと対価を出すのはインテリ層や、それなりにお金のある中産階級など、どちらかという左寄りの方々だったからです。でも、明日も暮らしにも困るような方々からすると、ニュースにお金を出すのもばかばかしい。とにかく、アメリカのマスコミはどちらかという左寄りになりがちです。

だから欧米のマスコミは、日本のアニメ・マンガの全体像にはあまり興味がありません。問題を見せるために、もっとも極端で過激な表現に引き寄せられていきます。「気持ち悪いよね。こういう酷いコンテンツに反対している人たちもいるよ。でもこの表現の自由を守ろうとしている人たちもいる。さあ、日本はこんな国でした、終わり」。こういう図式が非常に多い。

つまり、一部の例外を除いては、欧米のマスコミにはオリエンタリズム——即ち、欧米の観点から欧米以外の文化を、自分たちが相手よりもより有利で進歩してより成熟した社会であるということを立証するための異邦人として演出したがるという考えが残っています。異論はもちろん受け付けます。

7. 今後の見通し トランプの勝利と保守・地方の台頭

さて、最後に今後の見通しについて。

トランプ大統領の勝利について CBLDF のチャールズ・ブラウンシュタイン事務局長と話をした際に、アメリカが 80 年代に戻るのではないかととても悲観的な話をしました。

トランプ自身はかなり世俗的な人間です。「あの女優とヤッタよ、へっへっへ」ということを言って憚らないような人間ということからも分かるように、エロティズムとかセクシーなものに対してはかなりオープンです。もちろん路線変更する可能性はあると思いますが、しかしポルノに関しては何も公約しなかったので、国民の性的倫理に対してはあまり踏み込まず、中絶以外の問題についての新しい流れはあまり出ないだろうというのが私の見立てです。

ただ、重要なのはここからです。トランプ政権は「市民に権限を戻す」という理念を繰り返し強調しています。今まで蔑ろにされていた地方の住民の倫理観や主義主張を尊重しますとなると、宗教保守の方々は諸手を挙げて喜ぶわけですよ。「やったー、これでハリウッドとニューヨークのリベラルによる圧政から、僕たちの倫理観を守れる」と。ほぼ確実に、今までのアメリカで台頭していたグローバル文化とかポリティカル・コレクトネスの流れに対する巻き返しが強まるでしょう。

まあ、ゲーマーゲートの話とも重複するんですけど、彼らは、いわゆる左翼が押し進めようとしていたものを否定すること自体を嬉しいと思うというところがあり、「敵の敵は味方」という理屈で日本の性表現が守られる可能性もあるわけで、簡単には予測できませんが、オクラホマ、ユタ、アリゾナ辺りの、宗教的倫理観を強く押し進めたい人たちによる巻き返しが地方で進むのではないかと。例えば、全米に展開するコミックなどの小売チェーンの田舎にある店が手入れを喰らうんじゃないか。CBLDF などは、そんな可能性を危惧しています。

左翼浄化運動の機運

もう 1 つ気になるのが、左翼浄化運動の機運。これはオリンピックに関連している話で、アメリカに限らず、東京 2020 のオリンピックが日本社会の改造の機会として注目されています。だから、たとえば BBC やガーディアンや CNN が、日本のエロ産業とかコンテンツ産業とか女性の地位とか子どもの養育とか老人介護といった話題を扱うときに、必ずオリンピックの問題に関連付けて論じられます。これは単なる野合はなく、国内外、即ち日本と欧米の両方から、東京オリンピックを機に日本を変えようという流れが出て来るのではないかと思います。

国内市場冷え込みに後ろ押しされた日本国内コンテンツの海外展開拡大重要視

最後に、もう 1 つ重要なのが、日本国内の市場が若干冷え込みつつあることです。少子高齢化でマンガ・アニメコンテンツが日本市場だけでは食っていけない——ならば海外展開を、という流れです。『君の名は。』など多くの作品が海外で成功していることも踏まえて、じゃあ俺も俺もと海外に進出する方々が続いています。

今まで日本のアニメ・マンガコンテンツというのは、どちらかというコンテンツ輸出を担当する第三者、仲介業者を通して海外に行くことが多かったんですけども、ここ 5 年ほど、たとえば kindle とか、DMM.com とか、個人が英訳とか簡単な手段さえとれば、自分のコンテンツを直接海外に売ることができる環境が整備されています。

私は、これは非常に失礼な言い方だとはわかっていますが「野良進出」と呼んでいます。個人が海外進出すること自体は悪いことではないのですが、海外の勝手を知らずにただ闇雲で展開すると文化摩擦が発生しやすいと思います。今までは仲介先が、これは欧米に流すと問題になるよと歯止めをかけていたのが、全く歯止めが働かない形で日本のコンテンツが海外にどんどん出ていく。そういったことがこれから増えると思います。

逆に、海外の市場を意識した日本の色んな会社は、最初から海外基準に合わせようとする。「上手くやれば 300 億円狙える」といった甘い言葉で、日本のコンテンツの最大の魅力である自由度が失われるのでは、と警戒しています。日本は単に自由なだけじゃなくて、クリエイターが自由に競争できる、これが日本の市場の一番素晴らしいところだと私は思います。これが脅かされるのではないかと若干危惧しています。

以上が、私のプレゼンテーションになります。最後に、こういった講演の場所を設けていただいたうぐいすりボンさん、本当にありがとうございました。今後も、表現規制とはどういったものなのか、表現規制をめぐる文化とか、そういった議論がより成熟したものになることを私は願っています。うぐいすりボンさんは、それを支援しています。ですから、うぐいすりボンさんにも支援を何卒よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

抄録編集：井関竜也（京都大学大学院法学研究科）

【付録資料：レジュメ】

創作表現規制問題の国際的状況について

兼光ダニエル真

兼光ダニエル真

1972 年生まれ、東京出身の翻訳家。

日本の経済学者の父と合衆国ミネソタ州出身の母の間に誕生。ミネソタ大学東アジア学部卒。デビューは 1989 年だが、英訳翻訳活動は 1996 年から本格化。多数の日本のアニメ・マンガ作品の翻訳を担当。翻訳代表作ではアニメ『ガサラキ』、『ラブひな』、『機動戦艦ナデシコ』、『劇場版サクラ大戦』、『劇場版パトレイバー』及び『劇場版パトレイバー 2』（2006 年北米発売版）、マンガ『エクセルサーガ』（1～5 巻担当）、『イニシャル D』（5～11 巻担当）、『ブラック・ラーゲン』（1～5 巻担当）、『エヴァンゲリオン新劇場版』序・破・Qの三作、『宇宙戦艦ヤマト 2199』制作協力。最近では『日本アニメ（ーター）見本市』の字幕翻訳に加え、他の制作にも参加。複数のゲーム、アニメ、マンガ作品でも英語監修や文化考証など。和英・英和両方の翻訳や通訳を行う。

講演議題：

■1990 年の渡米と有害コミック問題

■日本と欧米の間のセクシュアリティの違い：

神の目と世間体

絶対的価値観と相対的価値観

正しい性の問題

■日本と欧米の間の検閲の違い：

崇高な聖書と下賤な世俗

お上の目、公序良俗の概念、権威と伝統の後ろ盾の獲得

■日本アニメ・マンガでの性描写と欧米（特にアメリカ）：

1) 北米アニメ世代第 1・5 世代のドマニアの世界、ポルノ解禁とサタン・児ポヒステリアの狭間で広がった支持

2) サタン・児ポヒステリアの変遷、北米コミック猥褻騒動

3) 日本のコンテンツの急速な浸透、HENTAI の爆発的な成長と不安

4) 保守宗教原典派に加えて左翼社会啓蒙派の規制機運

■日本アニメ・マンガコンテンツの規制を巡る英語圏（北米とその他）のクラスター：

- 欧米価値観に左右されがちライトユーザー層
- ドマニア消費者
- 左翼社会啓蒙派（アンチから SJW と呼ばれる人たち）
 - ◇ 自己啓発的正義感と倫理観 例：ヘイトスピーチ規制推進派
 - ◇ 押し付けが目立つ
 - ◇ 学者タイプでも多い
 - ◇ **Overly sensitive** 「過剰な配慮」
- ゲーマーゲート派（アンチから男性優位主義、人種主義と呼ばれる人たち）
 - ◇ 単純、騒ぎ好き、保守的
 - ◇ 自分の好きな表現が差別されていることだけに過敏
 - ◇ **Overly sensitive about others being sensitive** 「他人が配慮しているのに過剰反応する」

ポイント：SJW とゲーマーゲート問題について

ポイント：事実を捻じ曲げる専門家と運動家たちの罵り合い

イクワリティ・ナウとサンカク・コンプレックスの攻防
国連への影響力

- 保守・地方反動派
 - ◇ 古い派閥だが、今でもそれなりに力がある。特にトランプを当選させた地域では。
 - ◇ 宗教色が強い
 - ◇ **Insensitive** 「配慮しなさ過ぎる」
- 規制反対穏健派
- 反権威主義
- インフラ整備・提供（コンベンション、Amazon、Facebook、Twitter、など）
 - ◇ 既存の価値観にとらわれている顧客、監督能力を持つ政府、左翼社会啓蒙派による糾弾を恐れる
 - ◇ 新しいメディアほど守りに入る
 - ◇ メディア浄化を望んでいる

■ 海外マスコミの傾向：

- 左翼社会啓蒙派
 - ◇ 既存の社会に対して問題意識を持って取材に望む
- ライトユーザー層視点
 - ◇ なんとなく慣れていない表現が無い方が良いと言い出しやすい
 - ◇ 社会的に好ましくない表現を批難してポイント稼ぎ

- 保守・地方反動派
 - ◇ 日本のマンガやアニメを異質なもの、既存の社会への害悪として捉えがち
- 海外マスコミの共通項目
 - ◇ アニメ、マンガの全体像を視野にいれることは少ない
 - ◇ もっとも極端な表現へと引き寄せられる
 - ◇ 対立意見（規制反対）を紹介するのは厭わないが、あまり真剣に取り扱わない

■今後の見通し：

トランプの勝利と保守・地方の台頭

グローバル文化への反発

いわゆる「左翼ポリコレ」への巻き返し

左翼浄化運動の機運

オリンピックを日本社会改造の機会と国内外で注目

日本社会改造の一環として表現規制強化の台頭の可能性

国内市場冷え込みに後ろ押しされた日本国内コンテンツの海外展開拡大が重要視

「野良進出」の増大による文化摩擦がより発生し易い

海外市場を意識し、国内規制推進論が台頭しやすい